

表現、鑑賞の活動を補う言語活動の実践と考察

美術科 西澤 明

1. はじめに

美術科における新しい学習指導要領は、その内容等が大きく変わるものではない。最も大きな違いは、項目の立て方が整頓されたこと、「共通事項」が示されたことである。

これまでの学習指導要領の「2 内容、A 表現」では、(1) に絵や彫刻、(2) にデザインや工芸について示され、それぞれの項目の中で、「発想や構想の能力」、「創造的な技能」その他に関する内容が一緒に示されていた。領域ごとのまとまりはあったものの、評価の観点から見たときには、やや分かりにくい面もあったように思う。

新しい学習指導要領では、各学年の 2 内容、A 表現の (1) に絵や彫刻、(2) にデザインや工芸について示されているのは同じだが、(1)、(2) 共に「発想や構想の能力」に関する項目としてまとめ、あらたに立てた (3) の項目で、「創造的な技能」について示している。これによって、各領域、各学年における単元計画や授業計画と、評価規準、評価基準の結びつきが、より明確になったといえるだろう。

新たに示された共通事項は、表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要なものであり、3 学年（項目は、第 1 学年、第 2 学年及び第 3 学年の 2 つ）ともまったく同じ、以下の内容が示されている。

- (1) 「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。
- ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。
 - イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。

共通事項の内容については難しいこと、目新しいことは書かれていない。しかし、「形」、「色彩」、「材料」、「光」などの具体的な事項が示されたことで、単元及び教材を考える際の基盤が明確になったといえるだろう。

2. 美術科における言語活動

新しい学習指導要領では「言語に関する能力の育成」が大きな目標として示され、「言語環境を整え、生徒の言語活動を充実」することが求められている。確かな学力の重要な要素の一つである「思考力、判断力、表現力」をはぐくむために、各教科における「基礎的な知識・技能の習得と活用」を意図した学習活動が重要で、その基盤になるのが「言語に関する能力」だと示された。

美術科の言語活動について学習指導要領の解説書で取り上げられているのは、以下の「第 2 各学年の目標及び内容、2 内容、B 鑑賞、(1)、ア」である。

造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。（第 1 学年）

造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和の取れた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。（第 2 学年及び第 3 学年）

その説明には具体的に次のような点が記されている。（中略、太字は西澤による。）

「生徒が自分が気付いたことや考えたことなどを互いに言葉で説明し合う活動を通して、自分にはない新

たな見方や感じ方に気付き、見方や感じ方を広げることである。／〔中略〕言葉で考えさせ、その考えを整理させることも重要である。漠然と見ていては感じ取れないことが、言葉にすることによって美しさの要素が明確になり感じ取れることがある。言葉で表現することは見る視点を整理することにもなる。〔中略〕授業の中で「明暗の対比」や「リズム」、「柔らかい色調」などの造形に関する言葉を意図的に用いて説明したり話し合ったりすることで、一人では気付かなかった視点や概念で対象をとらえられるようになることもある。／このように、ものの見方や感じ方を豊かにしていくためにも、言葉によって学習を深めることは重要である。その際、対象のよさや美しさ、作者の表現意図や工夫などを感じ取り、考え、さらに他者と意見を交流して見方や感じ方を広げるために、生徒一人一人が感じ取ったことを大切に、自分の言葉で説明し合うことが効果的である。」（第1学年）

「生徒一人一人が感じ取った作品のよさや美しさなどの価値を、生徒同士で発表し批評しあい自分の気付かなかった作品のよさを発見するなどする。〔中略〕自分の感じたことや作品についての自分の考えを、根拠を明らかにして述べたり批評したりすることは〔中略〕大切な学習になる。また、自分の価値意識を持って批評するためには、自分の中に対象に対する価値を明確に持つことが前提になる。〔中略〕単に知識や作品の価値を学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら自分の中に作品に対する新しい価値をつくりだす〔中略〕ことが重要である。／〔中略〕各生徒が作品などに対する自分の考えを述べ合うことにより、一人では気付かなかった視点や価値に気付くことができるようになる。そこで気付いたことを更に述べ合うことにより、見方が一層広がり、質の高い〔中略〕活動に発展していくことになる。」（第2学年及び第3学年）

ここで確認したいのは、この解説は鑑賞活動の項目に対して記されたものであって、上記の引用文中の「〔中略〕」には、鑑賞教育であることを特定する文言が多く含まれていることである。確かに、美術の授業において言語が使われる場面は、鑑賞の活動に多く考えられるものではあるが、その鑑賞の活動で扱われる対象が「作品」であることは明らかである。対象の作品を通して、表現の「造形要素」や作者の「表現意図や工夫」といった観点を言語で考え、それを「記録」、「要約」、「説明」、「論述」といった活動を行うとともに、さらにそうした一人一人の考えを生徒同士で「発表」し合うことで、「説明し合い」、「話し合い」、「批評し合い」といった双方向の「意見の交流」が行われることになる。こうした言語活動は、作品を制作する表現の活動においてもさまざまな場面で実現が可能なものであり、実際に行われてきている。大切なことは、これまでに行ってきた単元や授業の中で、「言語に関する能力の育成」に関わる活動を意識し、整頓し、よりよい実現のために実践することだと考えた。

3. 授業における実践

過去数年にわたって実施している単元に、教室前の廊下に掲げる「レタリングによる表札」がある。これは3学年すべてが共通して取り組んでいるもので、基礎的・基本的な知識・技能の習得とその活用を、学年が上がるごとに発展的に学習することを大きな目的にしている。具体的には、

- ・1年時 ゴシック体と明朝体の知識、手本を正確に転写する知識・技能、絵の具をムラなくはみ出さずに塗る知識・技能を学習し、ゴシック体を使って制作。
- ・2年時 色の性質と感情の知識を学習し、それを活かした美しい配色計画を立て、1年時に学習した事項を活用して、明朝体を使って制作。
- ・3年時 手本を変形して転写する知識・技能を学習し、それを活かした画面構成を立て、1・2年時に学習した事項を活用して、自由な表現で制作。

という活動である。

今回、この単元をあらためて整頓し、これまで2年時に行っていた色の性質と感情の学習及びそれを活かした美しい配色計画を1年時に行うことにし、その中で「言語に関する能力の育成」に関わる活動を意識し、実践した。以下がその指導案からの抜粋である。配色を考える際に、事前に学習した色の感情及び過年度作品の鑑賞を参考にしながら、まず表現したいイメージを持ち、それを実現するためにはどのような色を使えばよいかを、これも事前に学習した色の性質の用語を用いて説明することにした。次に、一人一人が考えた配色の意図について隣通しで説明し合い、感想を言い合った。

単元名 レタリング表札一色塗り編一

学習活動の計画（総時数 7 時間）

活動内容	学習内容（思考力・判断力・表現力の育成に向けた）	評価規準
第1次 配色計画 (2 時間)	前単元で学習した「色の性質と感情」に関する知識を生かした配色を考える。(既習の知識の活用) 配色の意図をまとめ、発表しあう。(言語活動)	発想・構想の能力
第2次 制作（色塗り） (4 時間)	絵の具をムラなく、はみ出さずに塗る知識・技能の学習と実践。(基礎的・基本的な知識・技能の習得) 自己評価・・・完成作品の振り返りを行う。(言語活動)	創造的な技能
第3次 展示と相互鑑賞 (1 時間)	生活に作品が置かれるよさを味わう。 相互評価・・・友人の作品のよさを考え、伝え合う。(言語活動)	鑑賞の能力

本時の学習（第1次中2時）

(1) 題材名 配色計画と相互発表

(2) ねらい 「色の性質と感情」の知識を復習しながら、意図に合わせた配色を考え、決定する。

配色の意図を、「色の性質と感情」の言葉を使って説明する。

(3) 本時の展開

学習活動・内容	教師の指導・支援及び留意点	時間
水入れの準備 1. 導入一本時の活動の確認	板書で指示。	5 分
2. 配色の決定（前回の続き） ① 配色カードで確かめながら、基本の配色を決定し、スケッチブックに実際に色を塗っていく。	机間巡視 ・実際の色塗りで使う、ムラのない絵の具の溶き方を意識させる。 ・配色カードの色とまったく同じになる必要はないことを指示。 ・全体で2色～6色程度にとどめる。	20 分
3. 片付け	すばやく済ませるように指示。	5 分
4. 決定した配色について記入 ・①～③の順で記入。	ワークシート配布 ①は調子や感情の言葉、②は分類の言葉で説明することを指示。	5 分
5. 決定した配色について、隣同士で説明しあう ① スケッチブックを見せて相手の受けるイメージを聞く。 ② 自分の配色の意図とその分類の考え方を説明。 ③ 自分の意図を実現する配色について、相手の考えを聞く。	机間巡視	10 分
6. まとめ	相手の意見を参考にして、本番の色塗りでは改善しながら制作を進める。	5 分

ワークシートについては、以下のものを使用した。このワークシートについては、その前半で学習した「色の分類の言葉」をまとめ、後半では「①どんなイメージの配色にしたいか決める」、「②その配色にタイトルを付ける」、「③その配色を色の分類の言葉で説明する」という3つの課題を設定した。前半のまとめについては、後半の課題③を行うための補助的資料として位置付けている。課題①については、制作に

色の分類と感情のまとめ

1年 組 番, 名前

無彩色 色味のない色…白, 黒, 灰色。
色味がない＝色相, 彩度がない。
明るさの差はある＝明度はある。

有彩色 無彩色以外の色。
無彩色に少しでも有彩色が加われば, 有彩色。

色相 色味のこと。青みの, 赤みの, 青っぽい, 赤っぽいといった言い方をしよう。

彩度 色の鮮やかさのちがい。有彩色にしかない。
有彩色に無彩色が加われば加わるほど彩度は低くなる。

純色 無彩色がまったく加わらない, もっとも彩度の高い色。

明青色…純色に白が加わった色。
白が加わるということは, 白に近づくということ。
＝明度は高くなり, 彩度は低くなる。

暗青色…純色に黒が加わった色。
黒が加わるということは, 無彩色に近づくということ。
＝明度は低くなり, 彩度も低くなる。

濁色…純色に灰色が加わった色。
＝加える灰色の明度によって明度は高くなったり低くなったりする。
でも灰色が加わるということは灰色に近づくので, 彩度は低くなる。

明度 色の明るさのちがい。
すべての色には明度がある。
純色なら, 黄>黄緑>緑>青緑>緑みの青>青>青紫
黄>黄みのだいだい>赤みのだいだい>赤>赤紫>紫>青紫

① どんなイメージの配色にしたいか決めよう。
全体を明るい色（暖い色）でまとめたい, 鮮やかな色（落ち着いた色）でまとめたい, 文字が目立つようにしたい, 寒い（暖かい）感じにしたい, 強い（弱い）感じにしたい, などなど

明るく 優しい イメージ。
弱くもはく, 強くもはく
暖かい, 文字は目立たなくしてほしい。

② その配色にタイトルをつけよう。

③ その配色を, 色の分類の言葉を使って説明してみよう。

・ 明青色しか使わない
・ 明度はばらばらで色相も
いろいろ違うものを使う。
・ 様々な色を使いたい
・ 彩度は低くしすぎない!

当たっての意図を持つことが目的であり、課題②については、そのイメージにタイトルをつける取り組みである。

課題③が、今回の研究課題である「言語活動」、「説明」に対する試行と実践である。本来、美術における説明の活動は、言葉で表現するのが難しい感覚的なイメージを視覚的な色や形で表現し、相手に伝えるものであり、それは「非言語による説明」だと言える。しかし、色や形は、それを見る者一人ひとりによって受けるイメージが違うものであり、相手とコミュニケーションをとるためには、相手が分かるような説明をする必要がある。言葉を使った「言語による説明」は、その有効な方法と考えることができるだろう。しかし、言語による説明を行うためには必要な言葉についての知識をしっかりと理解していなければならない。色の学習における「色の分類の言葉」は多くの学校で取り上げられるスタンダードであり、美術の学習内容において重要な学習事項の一つ、基礎的・基本的な知識だと言える。

「色の分類の言葉」を学習する際に重要なことは、単にその言葉を覚えることが目的なのではない。すなわち、言葉という「言語による表現」で、色という「非言語による説明」を補う活動を行うことで、その学習の目的が明確になると考えたのである。

今回のワークシートにおける子どもたちの説明には、例えば次のような記述が見られた。

①どんなイメージの配色にしたいか	②その配色のタイトル	③その配色を色の分類の言葉で説明する
あざやかで目立つ明るいイメージ。	夏	すべて有彩色。赤から青の色相で、明清色を中心に使っていく。
落ち着いた寒い感じにしたい。	冬の雪	色相は青みがかったものを使い、明度を高くするために明清色にする。無彩色も使って全体的に再度を低くする。
落ち着いた、渋く、暗い感じ。	深い森	暗青色で、緑の明度がだんだん暗くなっていく配色。
文字が鮮やかで目立つ、背景が地味で暗い配色。	路上の草	文字は有彩色の純色で、色相は緑から黄緑。背景は、無彩色に非常に近い濁色。彩度はかなり低く、明度もかなり低い。
酸っぱくて、その中に甘くさっぱりしている深いイメージ	レモンソーダ	青っぽい色相で、できるだけ明度を高くする。彩度が高めの明清色。
文字を目立たせたいが、渋い感じ。	—	背景を暗青色にして、文字は彩度の高めの色にして目立たせる。
懐かしい感じ。	—	彩度が低い明清色。
明るくて優しい色。	メリーゴーランド	明るくて優しい色を作るために、純色に白を多めに混ぜて、明度の高い明清色を作り、鮮やかさも出すために、その明清色に入っている純色を組み合わせる。

4. まとめと考察

これまででも、表現の意図やテーマを、「色」に持つ感覚的なイメージで表現することは行ってきた。しかしそれは、非言語による説明であり、受け手側とのイメージの共有が必ずしも一致するとは限らなかった。それを「言葉」という言語で説明することによって、より具体的なイメージの共有ができる可能性は感じられた。さらに、「色の分類の言葉」を用いて構想をすることは、絵の具の混色のシミュレーションにもなっており、実際の制作活動における混色が、これまで以上にスムーズに行われたようにも感じられた。今後は色や形による「視覚的・非言語表現」の説明と、言葉による「非視覚的・言語表現」の説明を意識的に行うことで、表現活動によりよい成果が上がる実践を続けてみたいと思う。